



# 町民文芸

## 只見短歌会 令和四年六月詠草

葉桜のそよぐ石垣しば桜甘きかをりにしばし佇む  
関谷登美子

ひと冬を共に過せし友の声聞けば電話も自ずとはずむ  
馬場 八智

逝きて久し姑の名も消さず我の名を書き添へ備ふる二本の杖を  
目黒 富子

母の日の荷造り多く漸くに終へて見上ぐる樹々の葉青し  
新国由紀子

「加齢です」と診察されて落ち込むも我が身の不調何時まで続く  
渡部ヨリ子

たまに行く施設入所の朋らみてしみじみ思ふわれの仕合わせ  
新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会 六月定例会

日高俊平太 指導

若葉風水面を渡る波の舟  
人散りて葉桜の下深呼吸  
紺 青

村中のあぜ道刈られ梅雨に入る  
ねぎ坊主親の名前をまず聞いて  
恒 夫

トンネルの切れ目きれめに青葉山  
降り立つや無人駅舎は青田中  
礼

酒好きの義弟に供う山清水  
卓上の流しソーメン子のホーク  
一 穂

夏霧や孫と骨上げなお熱き  
夏用のバッグ残して逝きし人  
修 一

懐かしや知床の夏海荒ぶ  
夏雲や蟻のごとくに縦走路  
信

運動会で力走するやコロナ中  
田植え機のオペレーターは中学生  
都

ポケットから名刺出て来る更衣  
川風に腕まくりする五月晴れ  
味代子

潮干潟鬼の洗濯板を跳び  
長崎や娘と会うて春惜しむ  
真理子

